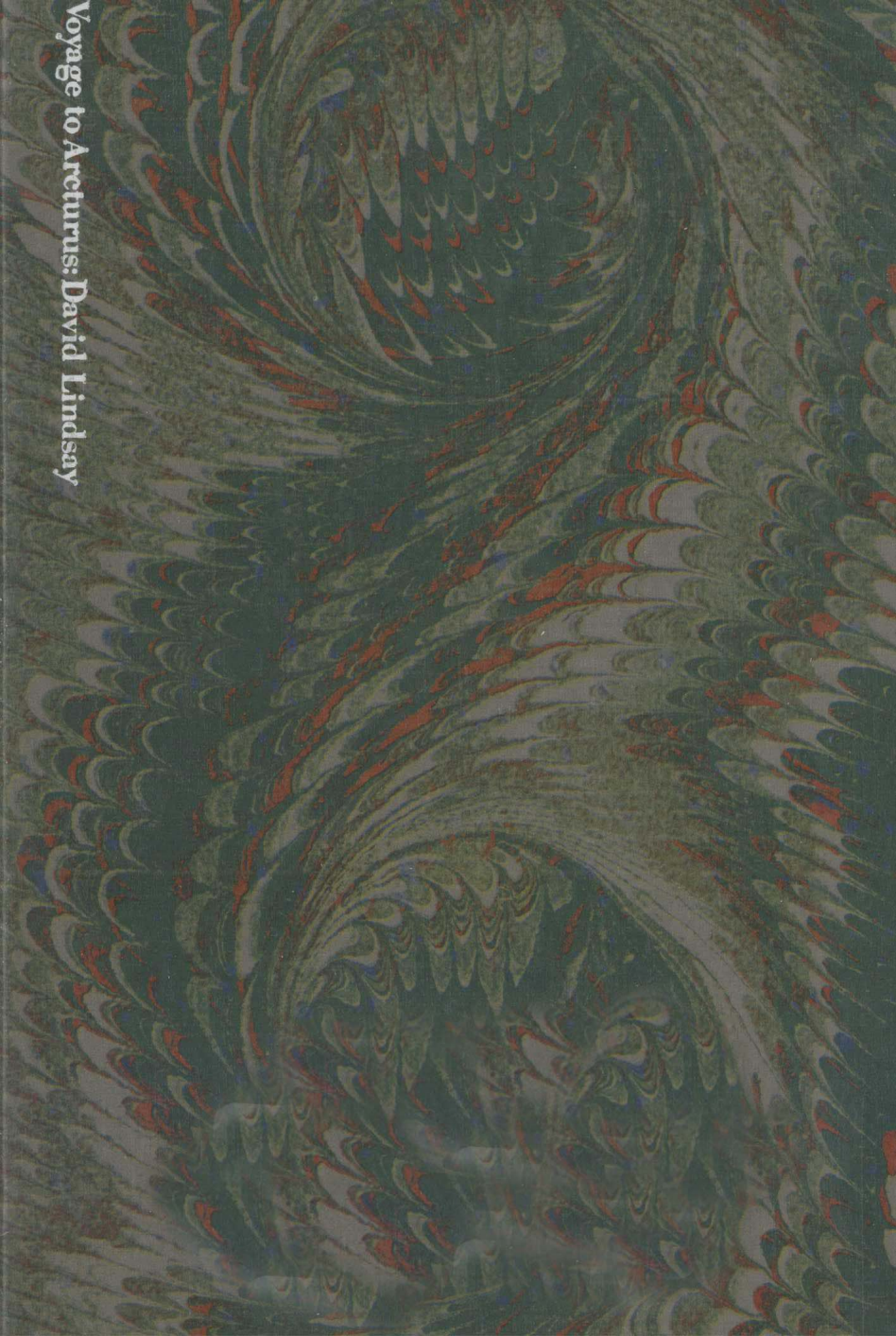


Voyage to Arcturus: David Lindsay



紀田順一郎 荒俣宏

『ルースへ
の旅』

世界幻想文学大系 28



ルースへの旅 D・リンゼイ
Ururus: David Lindsay

上 荒俣宏 訳

国民刊行会

世界幻想文学大系 責任編集 紀田順一郎＋荒俣宏
第二八巻 A

アルクトゥルスへの旅——上

昭和五五年一月二〇日印刷 昭和五五年一月三〇日初版第一刷発行

著者——デヴィッド・リンゼイ

訳者——荒俣宏

発行者——佐藤今朝夫

発行所——株式会社国書刊行会

東京都豊島区巣鴨三—五—一八 郵便番号一七〇 電話〇三—九一七—八二八七 振替東京五—六五二〇九

造本——杉浦康平＋鈴木一誌 本文挿画——渡辺富士雄

印刷——セイユウ写真印刷株式会社 製本——大口製本印刷株式会社

定価——二、〇〇〇円

●——落丁本・乱丁本はおとりかえします

荒俣宏あらまたひろし

一九四七年、東京都生まれ。

慶応大学卒。

専攻、英米幻想文学。

主要著訳書——

『別世界通信』月刊ペン社、

一九七七年。

『世界幻想作家事典』

国書刊行会、一九七九年。

『ダンセイニ幻想小説集』

創土社、一九七二年。

『ラヴクラフト全集』

創土社、一九七五年。

マクドナルド『リリス』

月刊ペン社、一九七六年。

H・G・ウェルズ他

『魔法のお店』奇想天外社、

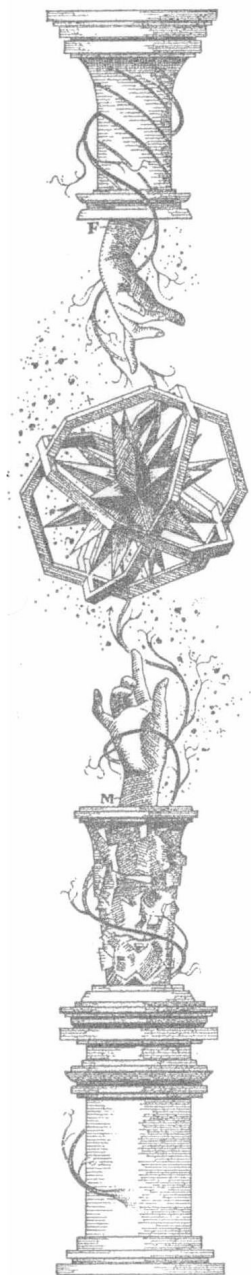
一九七九年。







アルクトウルスへの旅——上 D・リンゼイ——荒俣宏訳



目次



7	アルクトゥルスへの旅——上 D・リンゼイ
8	第一章——降霊会
30	第二章——街路で
40	第三章——スタークネス
48	第四章——声
58	第五章——出発の夜

70 — 第六章 — ジョイウィンド

100 — 第七章 — パノウ

126 — 第八章 — ラッシヨンの草原

144 — 第九章 — オシアクス

180 — 第十章 — タイドミン

220 — 第十一章 — ディスコーン山で

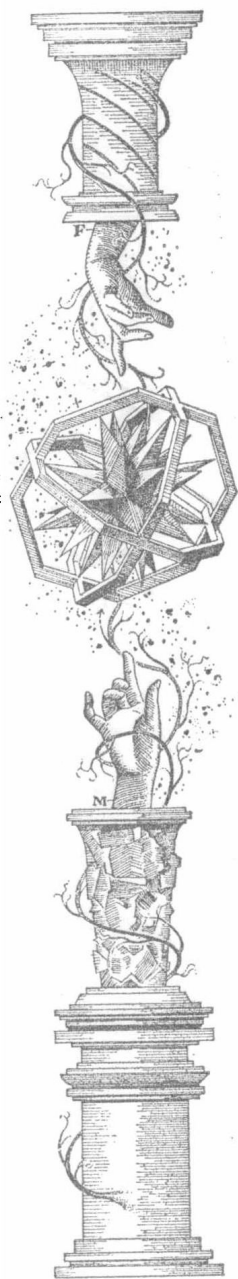
238 — 第十二章 — スペーデビル

以下、第十三—二十一章、解説は下巻

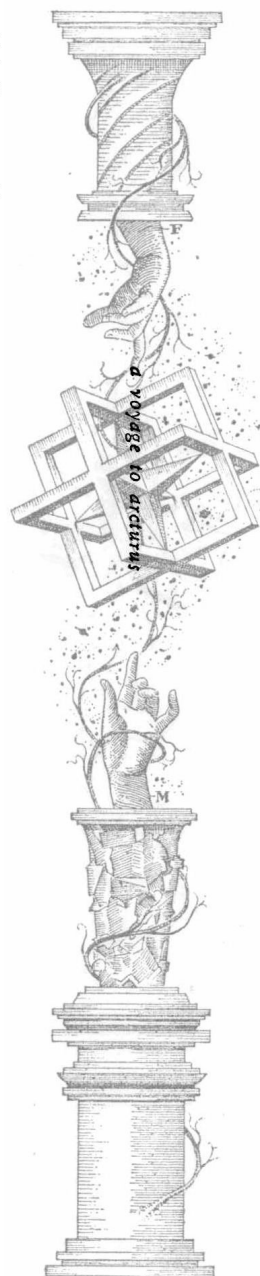




アルクトゥルスへの旅——上



第一章——降靈会



三月のある夜、時刻は八時、バックハウスなる霊媒——心霊界では急速に頭角をあらわしはじめている星——がハンプステッドにあるモンタギュー・フォール邸、俗にヘプロランズと呼ばれる屋敷の書齋に、案内されてきた。部屋の中の照明は、暖炉に燃えさかる炎ばかり。主人は、ほんのついでの好奇心から相手を見て、立ちあがり、そこでもいかにも形式的な挨拶が交された。暖炉の前にある安楽椅子を客に指し示したあと、この南アメリカの商人はふたたび自分の椅子に深く身を沈めた。電燈がつけられた。フォールの人目をひく容姿や、彫りの深い顔立ちや、金属をおもわせる皮膚や、すべてのものに飽きはててしまったかのような雰囲気も、バックハウスには、さして強い印象を与えないようだった。かれは、ある特別な観点から人間を観ることに慣れていたのだ。逆に、商人にとって、バックハウスは始めて目にするタイプの人間だった。かれは薄目をあけて、葉巻の煙を通してもの静かに相手を観察しながら、鋭角的な顎髭をたくわえた、この小柄な太り肉の男が、その病的な性質の職業にもかかわらず、どうしてこうも若さと正気を保っているのかと訝しく思った。

「葉巻を服るかね？」 会話のきっかけをつくるために、フォールはものうげに尋ねた。「服らないのか。では、酒はどうだね？」

「今は結構です」

沈黙。

「すべて順調にいつておるのかね、霊の肉化は起るのだな？」

「起らないわけがありません」

「それならいい。客たちを失望させたくはないからな。きみに支払う小切手は、このポケットに入れてある」

「終ってからで結構です」

「きみの言つてたのは、たしか九時だったな？」

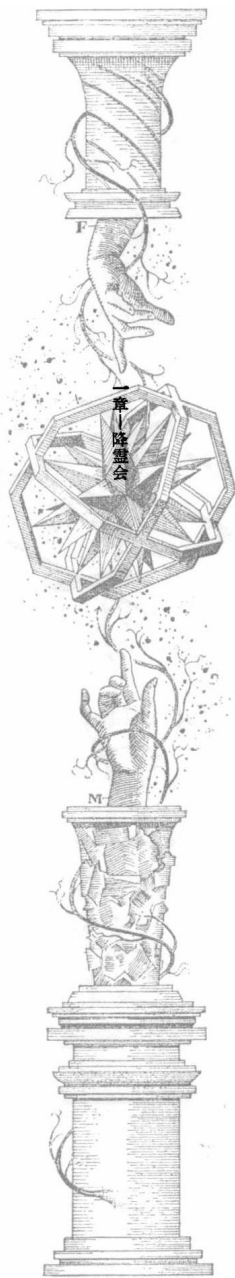
「そうだったと思います」

会話がとぎれた。フォールは椅子に体を沈めたまま、だらしなく手足を伸すと、あいかわらず無表情なまま口を開いた。

「どういう準備をしたのか、知りたくはないか？」

「お客さまがたの席以外、必要なものがあるとは思いませんね」

「わしが言っているのは、降霊術を行う部屋の飾りつけのことだ。音楽とかな」





バックハウスはフォールの目をみつめた。「わたしがてがけるのは、演劇ではありません」

「そのとおりだ。まあ言いわけをするようで何だが、ご婦人がたがやって来る。ご婦人がたは、知つてのとおり、美しいものに弱い」

「その点については、反対いたしません。ただ、最後まで、降霊術を楽しんでいただければよいと望むだけです」

バックハウスは、幾分そつけなくそう言った。

「それなら大丈夫だ」 フォールは葉巻を暖炉に投げこむと、立ちあがつて、ウィスキーをあおった。

「それでは、部屋を見てもらおうか」

「いえ、結構。その時が来るまでは、何ものにも接触したいとは思いませんから」

「それなら、客間にいる妹のジェイムスン夫人に会つてやつてくれ。わしが独り者だから、彼女^{あか}は時おり世話^{世話}焼^{ヤス}きをやってくれるのだ」

「喜んでお会いいたしましょう」とバックハウスは冷淡に答えた。

二人が客間に入ると、彼女はひとりぼっちで、物思ひに耽りながらピアノの前に坐つていた。ちょうどスクリアピン・イーを弾き終つたところだった。霊媒は一目で、彼女が小柄ではあるが引き締つた貴族的な容姿を持ち、陶器のように白い美しい手をしている

ことを見てとり、どうしてフォルにこのような妹がいるのかと不思議に思った。彼女は感情を抑えて、申し分のない仕草でバックハウスを迎えた。かれは女性に手を指しのべられることに慣れていたし、それにどう応えればいいかも知っていた。

十分ほど続いた、優美ではあるがうつろな会話の最後に、夫人は半ば囁き声でこう言った。

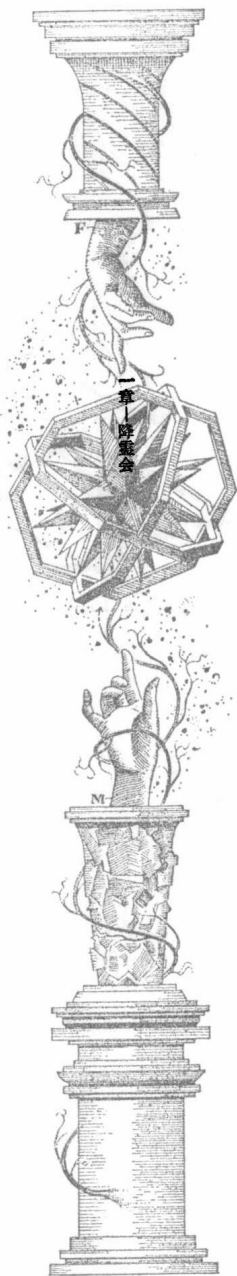
「わたしを驚かせているものは、もしお聞きになりたいのでしたら申しあげますけれど、霊の肉化などではありませんのよ——もちろんそれは素晴らしいことでしょうけど——それよりも、肉化が実現すると確信なさっておられるあなたのお心のほうが驚きですわ。どうしてそんなに確信がおりなのか、教えてくださいませ」

かれはドアの方に目をやりながら、答えた。「わたしは目を開けたまま夢を見るのです。他の人々はわたしの見ている夢を見ます。それだけのことですよ」

「でも、とてもすてきなことね」 ジェイムスン夫人はそう答えて笑ったが、最初の客が現れたため、うわの空の笑みになってしまった。

最初に現れたのは、抜け目ない裁判官気質で名高い、前治安判事ケント・スミスだった。もつとも男は、その気質をあえて実生活

＊１—ロシアの作曲家（一八七二—一九一五年）。プラバツヤの神智学に傾倒した。





にもちこまないだけの良識は持ちあわせていた。そろそろ七十歳も後半にさしかかるというのに、男の目は、回りにいるものを面喰らわせるように炯々と輝いていた。男は老人の選択眼を発揮して、いちばん坐り心地のよさそうな椅子を見つけると、すぐに腰をおろした。

「今夜は驚異を目にすることができるとだね」

「あなたの自叙伝にとつても、新鮮な話題だろう」とフォールが答えた。

「わしの不運な本のこととは言わないでもらいたい。バックハウス君、年老いた公共の下僕には余生のささやかなすびに過ぎんのだからね。そう警戒せんでいいのだ——わしも思慮分別はわきまえて執筆しておるから」

「警戒などしてはおらんよ。好きなものを出版することに、どこからも横槍がはいったりはしмайさ」

「それはご親切な」老人は、狡猾そうな笑みを浮かべた。

「トレントは今晚やつてきません」ジェイムスン夫人は兄に意味ありげな一瞥を投げかけて、そう言った。

「来るとは思つてなかったよ。あいつの性に合うものじゃないんだから」

彼女は前治安判事に話しかけた。「わたしたちみんな、トレント夫人にはお礼を申しあげなければならぬのですわ。あの人が二階の娯楽室をとてもきれいに飾つてくださつて、楽団の手配も済ませていただいたんですの」

「しかし、これはローマ風なすばらしさだ」

「バックハウスは、霊をもっと丁重に扱わなければならないと考えておるがね」と、フォールが笑いながら言った。

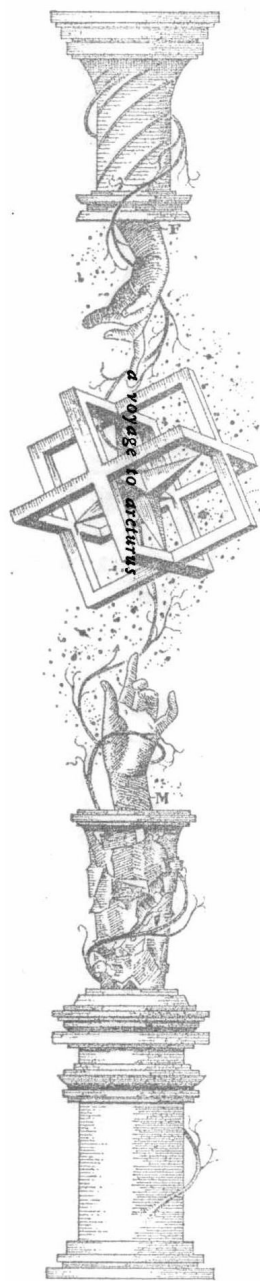
「バックハウスさん、たしかに……詩的な環境は……」

「失礼して、わたしに言わせてください。わたしは単純な人間で、いつも物事を単純なものにつきつめるのが好きなのです。反対はいたしません、わたしの意見だけを申しあげます。自然と芸術は別物だということです」

前治安判事がそれに答えた。「その意見には、あえてさからわないことにしよう。このような機会は単純に徹するべきだし、詐欺に対して目をひからせる必要があるわけだから。バックハウス君とやら、きついことを言ったが、どうか気にせんでくれたまえ」バックハウスは答えた。「降霊術は灯りの点された部屋の中で行います。部屋の中をいくらでも調べてください。わたしの身体を検査してもらってもよろしい」

気まずい沈黙がしばらく続いたが、二人の客が同時に現れたために、それも消えた。一人は、ロンドンで隆盛にやっているコーヒー豆の輸入業者ブライアで、もう一人は、仲間内ではアマチュアの奇術師としてよく知られている投機家ラングだった。バックハウスはこのラングとはいささか面識があった。ブライアは、部屋の中にワインのかすかな匂いと煙草の煙をふりまきながら、はなやいだ雰囲気をその場に送りこもうとした。しかし、だれもその努力に乗ってこないことを知ると、すぐにおとなしくなって、壁





に掛けられた水彩画を見つめだした。頭の禿げだした長身瘦軀のラングは、ほとんど口を開かなかったが、仔細にバックハウスを観察していた。

コーヒーとリキュールと煙草がみんなにふるまわれた。ラングと靈媒を除く全員が、相伴にあずかった。ちょうどそのとき、ハルバート教授が姿を見せた。かれは著名な心理学者で、犯罪者や狂人や天才といった人物を、精神的な面から捉えた著作があり、また同旨の講演をしたりしていた。このような集まりにかれが姿を見せたことは、他の客を幾分煙にまぐようなものだったが、同時に客たちはこの集まりの目的になにか重々しい要素がとたんに加わったかのような印象を受けていた。小柄で貧相な風采をし、振舞いもひかえめなこの人物は、おそらくこの集まりの中では一番頑固な心の持主であつたろう。かれは靈媒を完全に無視して、セント・スミスのとなりに坐ると、ひとことふたこと言葉を交しはじめた。

約束した時間よりもやや遅れて、トレント夫人が、取次ぎもうけずに姿を現した。年齢はおおよそ二十八ほどの女性だ。色白の、おつに澄ました気品ある顔立ちで、髪は黒くてしなやか、唇はあまりにも朱く肉官的なもので、まるで血が流れていているようにみえた。そして、その長身の優美な肢体に高価な衣装をまとうていた。彼女とジェイムスン夫人が口づけをかわした。彼女は残りの客に挨拶をすると、フォールをそつと見やつてほえんだ。フォールは意味ありげな貌で彼女を見たが、冷静さを保っているバックハウスには、フォールの目に浮かぶ悦にいった光の中に、獣性が秘められているのが察知できた。すすめられた飲食物を彼女が辞